

Rio

豊田市矢作川研究所 月報

◆平成22年度・研究所の活動 ◆矢作川
河辺の生き物マップ ◆カワヒバリガイの
発生を長期監視する新しい手法の試み
◆矢作川中流におけるカワヒバリガイの定
着と餌資源について ◆大幅に減少した
豊田市の魚類の多様性 ◆『矢作川資料
研究』第2集発行にむけて ◆第16回豊
田市矢作川研究所シンポジウムが開催さ
れました ◆矢作川研究所職場体験日記



3

2011
No.150

豊田市矢作川研究所 〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028 e-mail yahagi@yahagigawa.jp URL <http://yahagigawa.jp>

平成22年度・研究所の活動

生物多様性条約締約国の第10回国際会議（COP10）は、昨秋、特に地元愛知で大きなうねりとなって関係者を直撃しました。この会議では、「遺伝資源の利用から生じた利益を公正かつ衡平に配分することによって、生物多様性の保全と持続可能な利用に貢献する」とした名古屋議定書の採択と、「2020年までに生態系が強靱で基礎的なサービスを提供できるよう、生物多様性の損失を止めるために、実効的かつ緊急の行動を起こす」という新戦略計画・愛知目標の採択で幕を閉じました。それらの基本として、まず生物多様性にかかる圧力が軽減され、生態系が回復することを謳っています。

生物多様性にかかる圧力とは、一体どういう事でしょうか？豊田市内に生息する魚類は、大幅に数を減らしており、特に氾濫原（湿地的な環境）に生息する魚類や回遊魚、川底に生息する魚が打撃を受けている傾向がありました。それは生息環境が破壊されたのが原因と推定されました（山本研究員）。

この例にある生息環境の破壊と、外来生物、特に特定外来生物の繁殖は、その圧力として大きな脅威となっています。従って外来種駆除に向けての基礎的情報の集積は、生態系回復に欠かせません。本年度のカワヒバリガイの調査では、付着ロープ定着稚貝や浮遊幼生量が少なく、発生量が少なかったようです。その要因として、2010年8月中旬の川の水量が多く浮遊幼生が流された可能性がありました（内田研究員）。また、川底に定着したカワヒバリガイの主な餌資源となる植物プランクトンは、カワヒバリガイの成長が早く肥満度も高い晩春から夏にかけて流量が多い事がわかりました。従って、矢作川中流におけるカワヒバリガイの定着、大繁殖には植物プランクトンの流下が寄与していると考えられまし

た（白金研究員）。

生物多様性の維持には、現場で得られた情報に基づいて評価し、その結果に従って善後策を実施することが求められます。矢作ダム下流の河畔における生物相調査結果を地図上で見ることができる「矢作川 河辺の生き物マップ」が進行中です（洲崎・間野研究員）。そこから、河畔におけるある植生の偏在分布や全域分布の様子が見てとれました。また、あるチョウとその餌となる植物の分布が重なっていたり、オシドリやヤマセミが、落葉広葉樹高木林の生育する範囲のみで確認されているなど、植物の分布との関連が認められる動物種がありました。この取り組みは、基礎情報から生物間の相互関係を読み取り、その結果生物種の分布要因を見きわめ、有効な保全策を提示することが出来るようになる事を示しています。

人と矢作川の水との関わりについては、枝下用水の開削者西澤真蔵の祭祀や聞き取り調査から、本用水の特徴を探っています。また枝下用水の120年史を通して『矢作川資料研究』第2集を編纂中です（達研究員）。矢作川と用水とそれに関わる人との過去の情報は、矢作川の水利用に関する将来への貴重な資料となるでしょう。

生物多様性COP10の新たな目標を具体化する言わばポストCOP10事業が、今後最も期待される事です。研究活動と共に、矢作川「川会議」や「矢作川学校」などを通じて、地元各種団体との連携を一層深めつつ、あらためて、矢作川研究所として、流域の生物多様性維持・回復に邁進していきたいと考えております。

（間野隆裕、総括研究員）

矢作川 河辺の生き物マップ

- これまでに行われた矢作川の河辺における生物相調査結果を地図にのせる「矢作川 河辺の生き物マップ」作りに取り組んでいます。
- 主要な植物種の多くは上流から下流の広域に分布していましたが、ケヤキ（上中流）、ヤナギ類数種（中～下流）など分布が偏っている種も見られました。また植生についても、全域に分布するもの（竹林）と分布が偏るもの（ムクノキーエノキ林など）がありました。
- チョウ類の中には、食草が分布する範囲全域で確認されたもの（ゴマダラチョウ）や食草が優占種となる林と分布が重なるもの（コムラサキ）などがありました。これらの食草は水辺域を中心に分布しており、河畔林を守ることの重要性が示唆されました。
- 鳥類のオシドリ、ヤマセミは、いずれも落葉広葉樹の高木林がある範囲で確認されていました。
- 今後は更に多くの矢作川の主要生物種について分布要因を見きわめ、有効な保全策を提示することをめざします。

矢作川研究所では設立以来、矢作川のさまざまな場所で生物相調査を行ってきました。しかしそれらの調査結果は事業ごとに報告され、確認された生物種がどのように空間分布しているかということやその理由、環境や他種生物との相互関係については一部しか解析されてきませんでした。そこで、これまでの生物相調査結果を矢作川の地図上で確認・解析できるようにして、矢作川特有の生物生息状況や保全すべき生物間の関係、生物と環境の関係を明らかにし、河川管理のガイドライン作りに生かせるよう、生物マップの作成に着手しました。まず、陸生生物のデータから作業を始めています。

マップ作りに用いたデータを表1に示しました。矢作川研究所が1995～1999年度にかけて中流（豊田市中心部、河口から37～46km）と、市町村合併後の2006～2007年度に実施した上中流（主に新市域、河口から48～73km）の調査結果を参照しました。研究所は岡崎市以南の下流域では陸上の生物相調査を行っていないため、この範囲のデータについては国土交通省が2001～2004年度に行った河川水辺の国勢調査の結果（調査区間は河口から0～42km）を参照しました。調査地点数は分類群によって異なり、植物30地点、昆虫22地点、鳥類10地点などとなりま

表1 マップ作りに用いたデータ

調査範囲	調査主体	調査項目	調査期間
矢作川上中流	矢作川研究所	植物、昆虫、鳥類、両生類、爬虫類、哺乳類、貝類、甲殻類	2006～2007年度
矢作川中流（都市ブロック）	矢作川研究所	植物、昆虫、鳥類、哺乳類	1995～1999年度
矢作川下流	国土交通省（河川水辺の国勢調査）	植物、昆虫、鳥類、両生類、爬虫類、哺乳類	2001～2004年度 <植物(2004)、昆虫(2003)、鳥類(2002)、両生類・爬虫類・哺乳類(2001)>



図1 エノキの分布

した。今回はこの中から、主要な植生および生物種の分布に認められた傾向を記します。

河畔植生を構成する主要な植物16種の分布パターンを見ると、8種（落葉広葉樹ーエノキ、ムクノキ、アベマキ、オニグルミ、ネコヤナギ、タケ類ーマダケ、草本ーツルヨシ、チガヤ）が全域に分布していました（図1）。上中流を中心に分布していたのはケヤキのみで、逆にヤナギ類の多く（ジャヤナギ、カワヤナギ、タチヤナギ、アカメヤナギ、コゴメヤナギ）が中～下流を中心に分布していました。

また、上記の種が優占する植物群落の分布についても確認しました。すると、ほぼ全域に分布するもの（竹林、草地群落）、上中流に分布するもの（ケヤキ林、アベマキ林）、中流に分布するもの（ムクノキーエノキ林、コナラ林）、中～下流に分布するもの

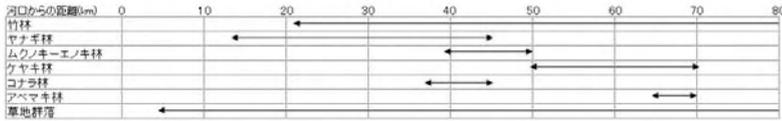


図2 主要な植生の分布

(ヤナギ林) があることが分かりました (図2)。

次に主要な昆虫40種の分布を確認したところ、水辺近くに生育するもの (ヒメドロムシ科、ハンミョウ科など) と森林性のもの (チョウ類、ガ類など) に大別することができました。エノキを食草とするチョウ類とガ類はあわせて7種いましたが、その中にはエノキの分布域全域に見られたもの (ゴマダラチョウ、図3) や、エノキの分布域の中でもより冷涼な上中流を中心に分布していたもの (オオムラサキ…国・県準絶滅危惧種) がいました。また、ヤナギを食草とするコムラサキは、ヤナギ林が存在する範囲のみに分布していました (図4)。矢作川流域内ではエノキやヤナギ類の多くが水辺域に生育していると考えられ、河畔林を守ることがこれらの種を保全するために重要であることが示唆されました。

続いて鳥類のオシドリ (国情報不足種) とヤマセミ (県絶滅危惧IB類) の分布を確認しました。オシドリは樹洞に営巣し、ブナ科の堅果 (どんぐり) を食べる種で、矢作川上中流で生息状況の詳細な調査が行われていますが (大畑、2009)、その分布はムクノキ、エノキ、ケヤキ、コナラ、アベマキのいずれかが優占する落葉広葉樹高木林の分布と重なっていました (図5)。これはムクノキやエノキ、ケヤキといったニレ科の大径木が営巣木を、コナラやアベマキといったブナ科の樹木が餌を、オシドリに提供しているためと考えられました。また、ヤマセミの分布域もオシドリとほぼ同じでしたが、これはヤマセミが、樹林に囲まれた淵で主に魚類を捕食するためと推測されました。

河辺の生き物マップづくりはまだ端緒についたばかりですが、稀少種を含むさまざまな動物と河辺の植物の分布の関係が少しずつ分かってきました。今後は更に多くの矢作川の主要生物種について分布要因を見きわめ、有効な保全策を提示することをめざします。

(間野隆裕、総括研究員・洲崎燈子、主任研究員)

引用文献
大畑孝二 (2009) 矢作川上中流域におけるオシドリの個体数. 矢作川研究, 13: 103-104.



図3 ゴマダラチョウの分布



図4 ヤナギ林とコムラサキの分布 (左上はコムラサキの写真)



図5 ムクノキ・エノキ林、ケヤキ林、コナラ林、アベマキ林とオシドリの分布 (左や下はオシドリの写真)

カワヒバリガイの発生を長期監視する新しい手法の試み

- 付着ロープを用いてカワヒバリガイの発生状況の監視を試みました。
- 2010年の夏、カワヒバリガイの発生量は極めて少なかったようです。

2007年から2009年にかけてカワヒバリガイ浮遊幼生調査を実施しました（Rio 2010年3月号No.139参照）。2010年度は、浮遊生活を終えて付着を始める稚貝の量を把握しようと、付着ロープを用いた調査を試みました。この調査は滋賀県立大学と財団法人電力中央研究所の三者で協力し、同じ方法を用いて進めています。カワヒバリガイが侵入した3つの水系（矢作川、琵琶湖・淀川と群馬県の大塩湖水系）の調査結果を共有し、より効率的な発生抑制対策を立てようと考えています。本報告では、矢作川の調査結果について紹介します。

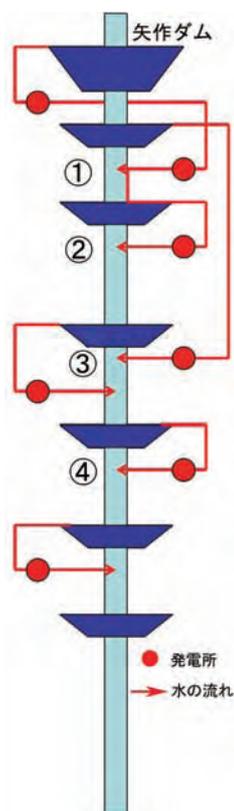


図1 水力発電による矢作川の水流

カワヒバリガイの浮遊幼生は一週間ほどの浮遊生活期が必要です。矢作川では、止水環境のダム湖が幼生のゆりかごになっている可能性があります。幼生が発生する水温20℃を超える7月末から10月中旬にかけて、水力発電に利用されたダム湖の水が本流に放水される場所（時瀬発電所①（図1参照、以下同）、笹戸発電所②、矢作第二発電所③、阿摺発電所④の下流）に付着ロープを設置しました。

この付着ロープは、梶原式付着ロープといい、海の付着生物の定量調査に考案されたものです。矢作川では直径6mmのクレモナロープの縋りを手でいねいにほぐし（写真1）付着面積を大きくして用

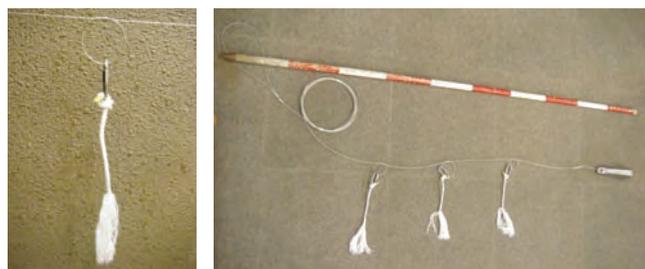


写真1 梶原式付着ロープ 写真2 ワイヤロープにセットした付着ロープ

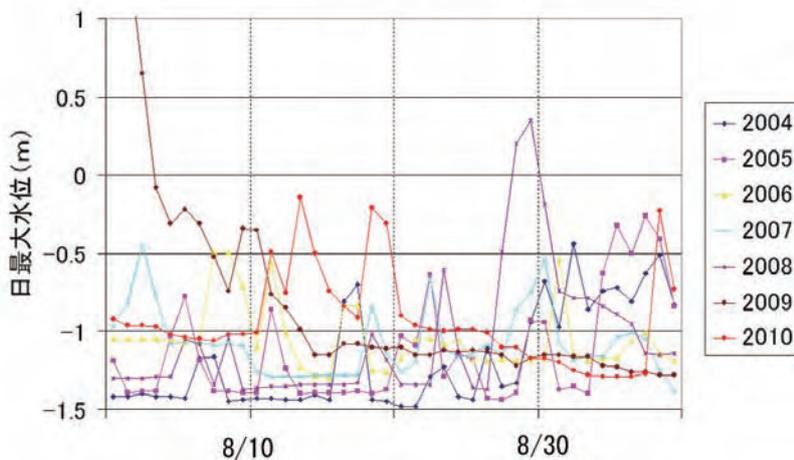


図2 中流(高橋)の日最大水位の変化

いました。房状になったロープをワイヤーロープに取り付けて（写真2）各調査地の川岸から流水に流し入れ、2週間毎に新しいロープと取り替えました。

カワヒバリガイ（稚貝）の付着が確認できたのは、時瀬発電所および矢作第二発電所の下流から9月下旬と10月に回収した付着ロープでした。付着量は、1本のロープに数個から数十個程度で、他水域の先事例のデータと比べると、かなり少ない量でした。また、2010年夏の浮遊幼生も2007年から2009年と比較すると少ない傾向を示しました。

なぜ、2010年夏、カワヒバリガイの発生量は少なかったのでしょうか？ これまでの調査でカワヒバリガイの浮遊幼生は8月から9月上旬に多く発生することがわかっていますが、昨年夏の矢作川の状況をふり返ると、増水していた日が多かったことが気にかかります。そこで、矢作川の流量変動を中流の水位変動から推察しました。カワヒバリガイが初めて確認された2004年から2010年の夏の日最大水位の変動をみると、2010年は8月中旬の水位が最も高くなっていました（図2）。増水によってダム湖水の滞留時間が短くなって繁殖が上手く行かなかったのでしょうか？ 昨年夏、カワヒバリガイの幼生や稚貝が極めて少なかった原因を明らかにできれば、発生抑制のヒントにつながります。

今後、矢作川においてカワヒバリガイの年変動はどのように推移していくのでしょうか？ まずは簡単でかつ正確な発生量が把握できる効率的な監視手法を見出せるよう取り組んでいきます。

（内田朝子、研究員）

矢作川中流におけるカワヒバリガイの定着と餌資源について

- 矢作川中流ではカワヒバリガイの幼生が、2008年は川底に着底しましたが、2009、2010年はほとんど着底しませんでした。
- 主な餌資源とされる植物プランクトンはカワヒバリガイの成長が早く、肥満度（身入りの良さ）も高くなる時期に流量が増加することから、矢作川中流におけるカワヒバリガイの定着、大繁殖には植物プランクトンの流下が寄与していると考えられました。

2006年に特定外来生物に指定されたカワヒバリガイは2004年に矢作川で確認されて以降、特に中流域で大量発生しましたが、2006年秋に大量死した後、再び増加傾向が見られました。このカワヒバリガイの大量発生、大量死の要因として餌資源となる河川懸濁物の量と質が関係しているのではと推測されたため、2008年6月から矢作川中流で調査を開始しました。毎月、川底の石の裏から採集したカワヒバリガイの殻長を測定して成長を求め、軟体部の乾燥重量をカワヒバリガイの殻の体積で除して肥満度（身入りの良さ）を求めました。また、カワヒバリガイの主な餌資源とされる植物プランクトンの季節変化を調べるため、毎週、河川水を採水して植物プランクトンの指標とされるクロロフィルa量を測定しました。

2007年および2008年の夏に生まれ、川底の石の裏に定着したカワヒバリガイの成長と着底状況を概観すると、2007年産まれのカワヒバリガイは調査開始の2008年6月から秋にかけて成長し、9月には2008年夏産まれの個体が加入しました（図a）。両年産まれとも、晩秋から早春にかけてほとんど成長しませんでした。しかし2009年、2010年は夏に生まれ、その後の浮遊期を経て秋に川底の石の裏に着底するはずの稚貝が、ほとんど確認できませんでした。

肥満度は繁殖期前の5月から繁殖期の7月にかけて、毎年高くなる傾向が見られました（図b）。餌資源とされる植物プランクトンの流量は成長が早く、肥満度も高い春から夏にかけて毎年増加しました（図c）。従って、矢作川におけるカワヒ

バリガイの定着、大発生には植物プランクトンの流下が寄与していると考えられました。

矢作川では本流に7つものダムが設置され、さらに流域全体では30近いダムがあるため、従来、日本のような流れのある河川の中流には存在しないとされる植物プランクトンが流下し、カワヒバリガイに餌資源を供給していることが分かりました。流量を増やして本来の河川環境に近づけることで、植物プランクトンを減らし、今後のカワヒバリガイ駆除に繋げることができればと思います。

（白金晶子、研究員）

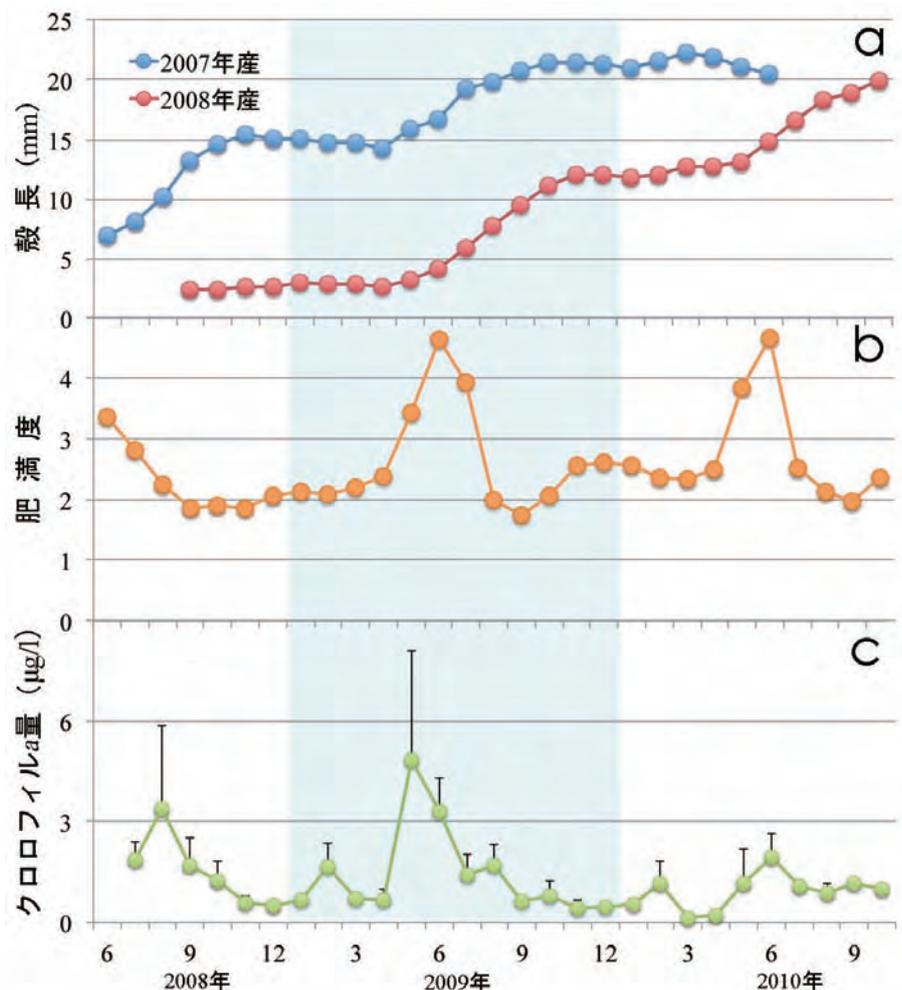


図 a) 2007年、2008年産まれのカワヒバリガイの殻長変化（毎月の殻長分布から各年産まれの平均殻長を解析）。 b) カワヒバリガイの肥満度（身入りの良さ）の変化。 c) 餌資源となるクロロフィルa量（植物プランクトン量の指標）の変化。

大幅に減少した豊田市の魚類の多様性

- 聞き取りの結果、過去40年間に豊田市では全体の48%にあたる22種の在来淡水魚が大幅に数を減らしていることが分かりました。
- 22種のうち13種は河川の氾濫原に生息する魚種で、氾濫原に生息する魚種の87%にあたります。その他には、回遊魚や川底を利用する魚種が数を減らしている魚として浮かび上がりました。
- 今回得られた傾向は、河川の生物の生息環境を復元していくにあたり、「環境のどの部分に重点をおくべきか」の一つの指針となることが期待できます。

COP10が開催された今年度、生物多様性という言葉が一般の人々にまで浸透した年でしたが、豊田市において生物多様性がどの程度減少しているか、全体像を把握することは簡単そうでいて実際には容易ではありません。多様な生物の生息情報を記載するのも労力のかかる作業ですが、過去のデータは極めて限られているのが実情です。そこで、豊田市に50年以上にわたり居住し、淡水魚類を見つめ続けてこられた3名の方に、過去40年の間に大幅に減ったと思う魚種を聞き取りによってリストアップしました。補足的に既存の文献資料を参照し、聞き取った結果と矛盾がないか確認しました。

その結果、3名が揃って「大幅に減少した」と評価した魚種は22種にのぼりました(図1)。これは豊田市に生息する在来の淡水魚類全体(46種)の48%にあたります。図2に大幅に減少した魚種のうち、生活様式の特徴を類型化して示しました。最も多い生活型はフナやメダカ、タナゴなどの氾濫原(水量の増減により、干上がったたり浸水したりする浅い水たまりや湿地的な環境)に生息する魚類で13種にのぼりました。氾濫原に生息する魚種は全体で15種と試算されましたので、実にその87%が大幅に減少しているといえます(図3)。その他には海と川を行き来する回遊魚、主に礫質の川底に生息する魚が大きく数を減らしている傾向が読み取れました。減少したのは、これらの魚たちの生息環境が破壊されたのが大きな原因と推定しています。矢作川研究所ではこれまで回遊魚のアユを指標に研究を進めてきましたので、回遊魚やアユの生息場所と重なる河床の環境に注意を払うことは可能ですが、その他の生活様式をとる魚たちには配慮が疎かとなりがちです。

今回把握できた傾向は、厳密な科学的調査に基づくものではなく、個々の魚種の動向については誤りがあるかもしれません。ただ、全体的な傾向すなわち、魚が利用する場としての氾濫原の喪失、河床の構造の改変、ダムなどの横断工作物による魚類の移動阻害が魚類の多様性に大きな影響を及ぼしている

可能性は十分に想定され、魚類の保護を推進するにあたっての一つの指針として活用できそうです。

(山本敏哉、主任研究員)

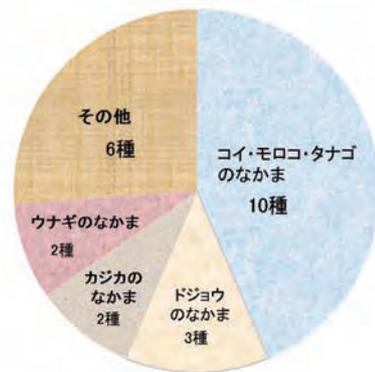


図1 過去50年で大きく数を減らした魚類の分類群



図2 過去50年で大きく数を減らした魚類の生活型

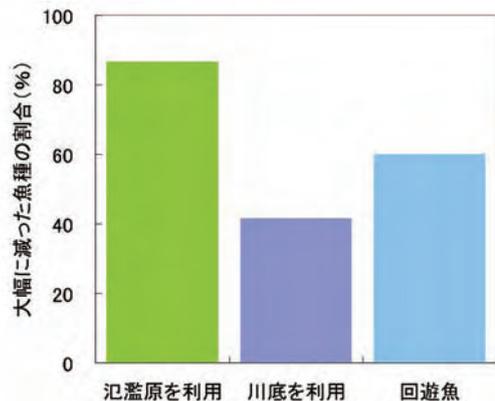


図3 各生活型の魚類のうち減少している割合

『矢作川資料研究』第2集発行にむけて

- 「枝下用水の話を聞く会」を実施し、聞き取り調査をおこなっています。
- 研究成果を枝下用水史研究会やニューズレターで地域の方々に報告しました。
- 日本民俗学会年会において本研究発表を行いました。

矢作川を水源とする枝下用水120年史編集に取り組んでいます。2010年度は、成果目標として資料集の発行を設定し、編集委員会では何をどのように記していくかの検討を重ねていきました。

枝下用水史の主たる資料となる豊田土地改良区所蔵の資料目録数は現在1,135ですが、これはこの120年史編集が期限付き作業であるため、あえて綴られた資料を分解せず目録化した結果です。所蔵する膨大な資料群の中から資料を選び出す作業を何度も繰り返しました。

それでも文字資料には限界があり、受益地の方々の実体験や水との関わりを知るために、本年度は「枝下用水の話を聞く会」を実施しました。竹下地区、糟目春日神社宮司・神職御一家、若林地区、鴛鴨地区、そして豊田土地改良区（理事長・事務局長・枝下用水地区委員長）など、わずか数十年前でも実感できない様々な水の苦労をお聞きすることができ、貴重な聞き取り資料を得ました。その成果はニューズレター『枝下用水日記-120年史編集-』vol.3（2010年6月23日発行）・vol.4（2010年11月27日発行）にまとめ、交流館等に配付しています。

本年度は研究成果として昨年を引き続き、枝下用水史研究会を行いました。今回のテーマは矢作川から枝下用水を切り開いた西澤真蔵に対する追弔会や慰霊祭といった開削者祭祀について、祭祀を行っている受益地の方々にお聞きいただきました。身近な内容だったこともあり、多くのご教示をいただき、当事者の方々がこの祭祀を自分たちの責任として残していきたいという思いでいることがひしひしと伝

わってきました。と同時に、既に無くなった祭祀についても把握しておくことの必要も感じ、新資料収集のきっかけとなりました。

開削者祭祀については3年がかかりましたが、ようやくこの3月に出席する祭祀をもって全てに参加することになります。この枝下用水受益地の中では当たり前になっているこの開削者祭祀については、日本民俗学会年会において「用水における開削者祭祀―枝下用水と西澤真蔵―」として研究発表を行いました（Rio2011年2月号No.149参照）。水源地における開削者祭祀は珍しいものの、これほど受益地各地で祭祀が続いていることについては注目され、来年度は枝下用水からだけでなく全国の用水史から学んでいく必要を感じました。

その他にも農業に関わる祭りとして西神明社（豊田市畷部西町）の御田扇祭の調査も行い（Rio2010年11月号No.147）、西澤真蔵の生家のある滋賀県愛荘町も訪ねました。生家は地元の方々に管理されていますが、愛知県豊田市での功績を知る方は少なく、編集作業の意義も感じました。

現在、資料集発行の最後の作業段階です。複数のスタッフで進めていく調査作業は、月1回の編集委員会とスタッフミーティングだけでなく、ブログ形式の業務日誌を駆使することでほぼ全員が新たな発見を同時に共有しています。折しも目まぐるしく動いていく農政についても学びながら、来年度は矢作川流域の暮らしのいまこれからに近づいていきたいと考えています。

（達 志保、研究員）



写真1 「愛知県下新十名所その六 平戸橋勘八峡」
(1927年、みよし市立歴史民俗資料館蔵)



写真2 現在の勘八峡(2010年11月9日)

▶ 第16回 豊田市矢作川研究所シンポジウムが開催されました

今年度の研究所シンポジウムは2月5日（土）に豊田産業文化センターで「矢作川の外来生物」をテーマとして開催され、211人の方々にご参加頂きました。滋賀県立琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員による基調報告「外来生物の脅威：とくに川環境での影響と対策」では、在来種と仲良くできない外来種が問題であること、生物多様性は長年同じ地域に暮らした生物の間に培われること、外来種対策は持続が重要であることなどを、事例をまじえて分かりやすくご説明頂きました。続く調査報告では矢作川研究所の内田・白金両研究員より、7年間にわたるカワヒバリガイの生態調査の結果と今後の長期監視及び抑制対策に関する提案が示されました。その後、地域の外来種駆除の実践事例として椿隆明氏（釣り師）からオオカナダモ、酒井研究員（矢作川研究所・矢作川水族館）からアメリカナマズ、西村薫氏（愛知県河川課）からアレチウリを対象とした活動が紹介されました。

後半のパネルディスカッションでは矢作川研究所の間野総括研究員がコーディネーターを、中井克樹氏がコメントーターを務め、阿部夏丸氏（作家・矢作川水族館長）、



基調報告を行う中井克樹氏

新見克也氏（NPO法人矢作川森林塾）、西村薫氏をパネラーに招いて、愛知県の外来種対策や国交省による駆除活動の支援体制も紹介しながら、異なる主体の間でどのように連携しながら外来種問題に取り組むかということについて議論が行われました。
(洲崎燈子)

▶ 矢作川研究所 職場体験日記

矢作川研究所では、職場体験学習として市内の中学校や豊田高専の学生さんを受け入れています。昨年の7月～11月にかけて5校で8人の学生さんが、現場で水生生物の調査や分析作業、事務的な作業など実際に研究所の仕事を体験しました（写真）。矢



作川研究所を希望した理由を聞くと、「川の生物に興味がある」ことや「環境や川の勉強をしたい」といった純粋な答が帰ってきました。川に興味があるものの近くに川が無く、川遊びを体験したことが無い学生さんも来ました。矢作川の生物に関することや河川環境について、体験日数は短いですが多くのことを学んで矢作川のことを知ってもらいたい気持ちで所員が対応しています。

職場体験に来た学生さんは、今後も川に興味を持って、職場体験で得た経験を忘れずに社会でがんばって欲しいと思っています。来年度も職場体験の学生さんを受け入れていますので、川に興味を持っている学生さん、これから矢作川を知りたい学生さん、ぜひ、矢作川研究所へ来て職場体験学習を通じて、矢作川のことや生物、環境について知ってもらいたいと思っています。
(内田良平)

後記

研究所に勤めるようになって初めて、昨年の夏に子供を連れて、川に魚を捕まえに行きました。子供たちは、大喜びで川遊びしてました。よほど楽しかったのか、また川で遊びたいと言いだし、捕まえた魚を飼うための水槽も買うことになりました。水槽の中には、今でもドジョウやオイカワがいます。今年の夏も子供たちを川遊びに連れていき、子供たちと一緒に川と関わっていきたいと思っています。（内田り）